

〈論文〉

北魏末・東魏代の斉州と龍洞石窟の造営

高 瀬 奈津子

はじめに

山東の仏教造像については、とくに近年、青州や諸城など山東東部から単体の石仏像が大量に発見され、近隣地域の影響を受け入れながらも、これらの地域独自の特徴を備えた仏教造像が作られていたことが明らかとなった。石窟についても、済南・青州周辺に北朝期のものがあるが、隣接する河南・河北・山西にある雲岡石窟や龍門石窟、響堂山石窟、天龍山石窟のような、大型の仏教石窟は存在していない。そのためか、山東では戦前より石窟について調査はされていたものの、戦後になると摩崖刻経ほど詳細に山東の北朝期石窟を取り上げた調査・研究は少なくなった。近年、岡田健氏や張総氏によって、済南市にある黄石崖石窟の調査・研究が出され、黄石崖石窟が済南地域で最も早く造営された石窟であり、造像様式や題記などの調査から河北や河南北部との関わりが指摘された⁽¹⁾。

本稿で取り上げる龍洞石窟は、後述するように題記から黄石崖石窟との関係が深く、数少ない北朝時代の山東の仏教石窟造像の一つである。その点で、龍洞石窟の造像様式を調査・研究することは、山東と他の地域との仏教様式の交流について考察する手がかりを提供しているのではないと思われる。しかし、龍洞石窟も昔からその存在が知られていたものの、1950年代半ば以降はほとんど取り上げられることはなかった。筆者は、2005年9月に山東・河北・河南の仏教関連の石刻遺跡を訪問し、その際に龍洞石窟を見学する機会を得た。龍洞石窟についてはすでに別稿でその現状について報告したが⁽²⁾、紙幅のため写真等割愛せざるを得ず、石窟造営の背景についても論証を加えることができなかった。そこで本稿では、行論の都合上、再度龍洞石窟の現状を報告した上で、あわせて題記から龍洞石窟が造営された当時の政治状況について検討したい。

一、山東省済南市龍洞石窟の現状

龍洞石窟は、山東省済南市の東南 15 km の龍洞庄にある龍洞山中の峯にある（写真 1）。済南市の市街地に入る手前で高速道路を降りると、左に龍洞山が見えてくる（写真 2）。龍洞石窟のある済南市は、北魏～北斉時代では齊州歷城県に属した（地図参照）。現在、石窟を含む龍洞山中一帯は人民解放軍の基地内にあるが、近年、龍洞山周辺は週末と祝日

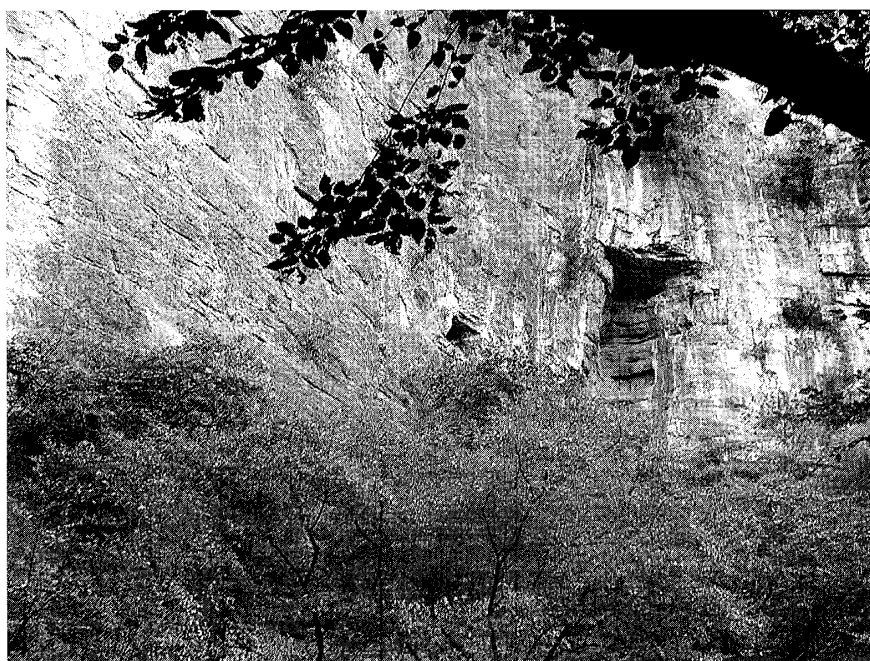


写真 1 龍洞石窟周辺



写真 2 龍洞山

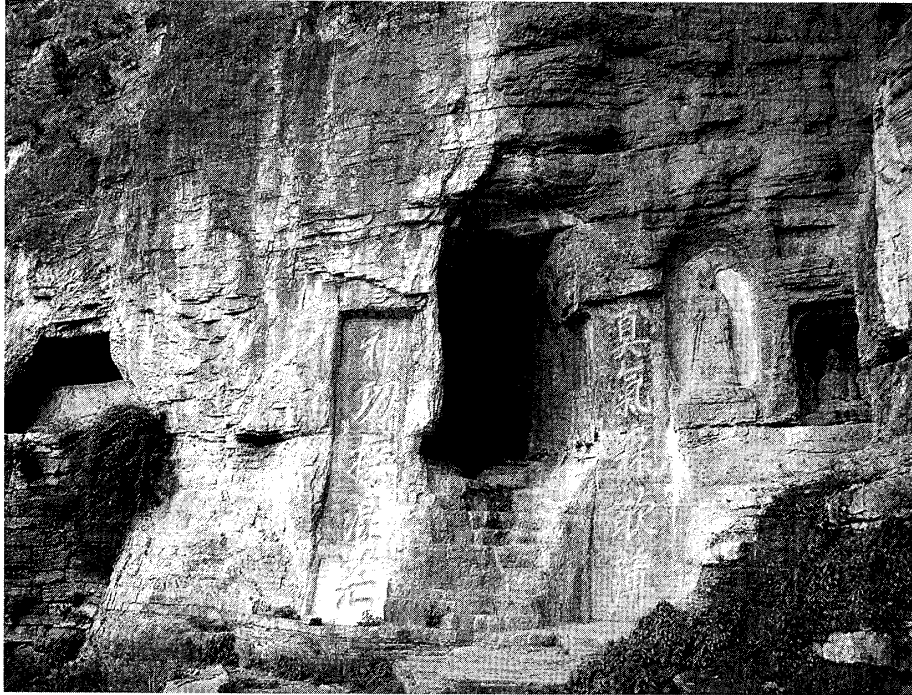


写真3 龍洞石窟

のみ開放され、一般の住民も立ち入ることができるようになった。基地の鉄門を通り、車で10分ほど行くと山のふもとに着く。そこからさらに歩いて15分ほど登ると、石窟に到着する。龍洞石窟は、自然の洞窟を活かした三つの洞窟と数ヶ所の摩崖窟からなる（写真3）。この三つの洞窟については、北側に入り口がある二つの洞窟を第1洞と第2洞、東側に入り口がある洞窟を第3洞とする（見取図参照）。この第1洞と第2洞は内側でつながっている。龍洞石窟の調査についての報告は戦前の関野貞氏の報告を嚆矢とするが⁽³⁾、戦後は石窟を含む龍洞山一帯の立ち入りが困難だったせいも、あまり多くない⁽⁴⁾。

(1) 第1洞

第1洞は、南側と東側に如来三尊立像（第1洞第1龕と第2龕）、西側に如来立像1体（第1洞第3龕）がある。まず、第1洞第1龕は如来三尊の立像で（写真4、5）、主尊は、像高約4m。高髻。光背は不明。僧祇支を着け、胸の前に結び紐をあらわす內衣を着け、袈裟をつける。袈裟は右肩にかかって、胸前を空け大きくたるみをつくりながら左腕にかかる⁽⁵⁾。袈裟が足まで下り、その下から両足が出る。右手は施無畏、左手は与願印。体全体が丸みを帯びている。向かって右側の脇侍菩薩は両手を欠損しているが、左側の菩薩は、左手は垂下して環状？の持物を執り、右手は胸前で蓮蕾を握る。どちらも頭は高冠をかぶり、頭光が浮き彫りされている。大袖の衣服を着用しているが、装飾などは不明。反花座の上に立つ。

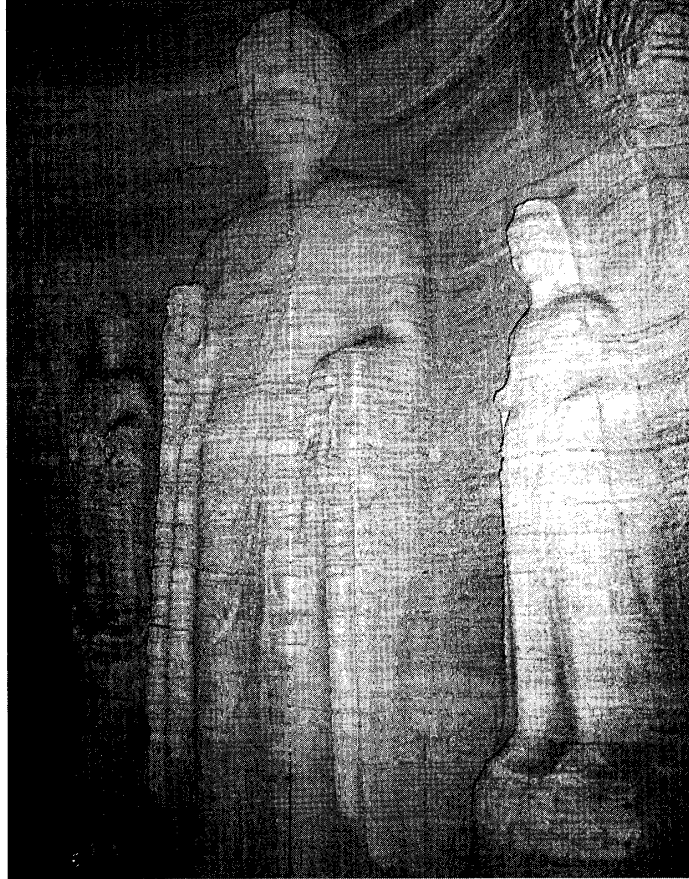


写真4 第1洞第1龕

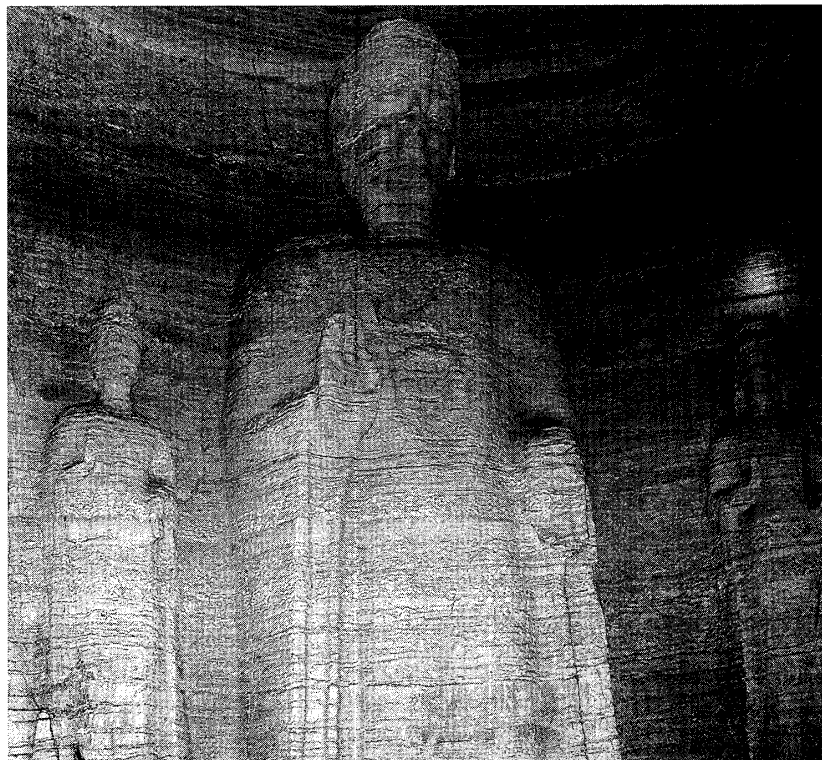


写真5 第1洞第1龕の拡大

第2龕も同じく如来三尊の立像である（写真6, 7）。主尊は、像高約4 m。頭部は破損しているが、高髻の痕跡があるように見える。光背は舟形が浮き彫りされている。着衣の形式は第1龕と同じと思われるが、膝から下が欠損しているので、裾の状態などは不明。

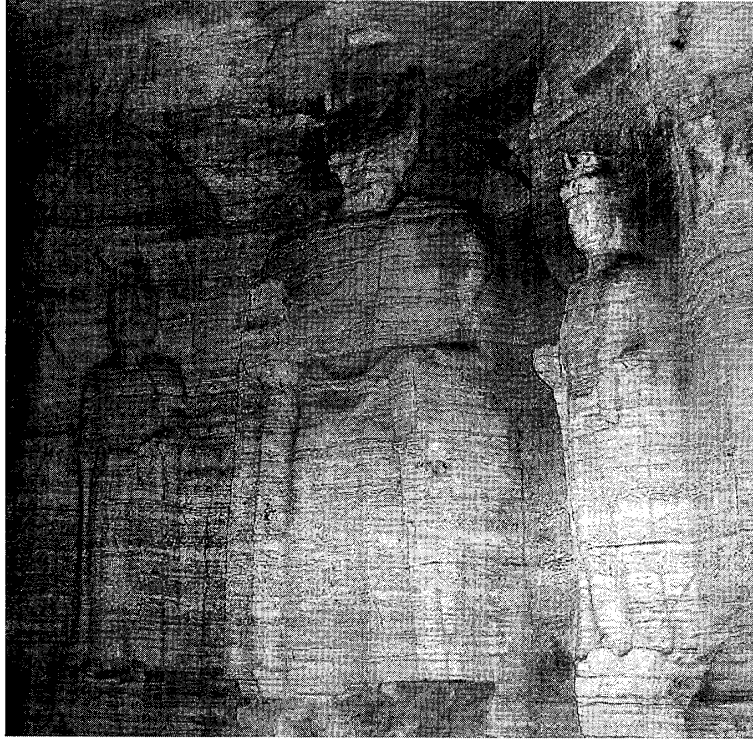


写真6 第1洞第2龕

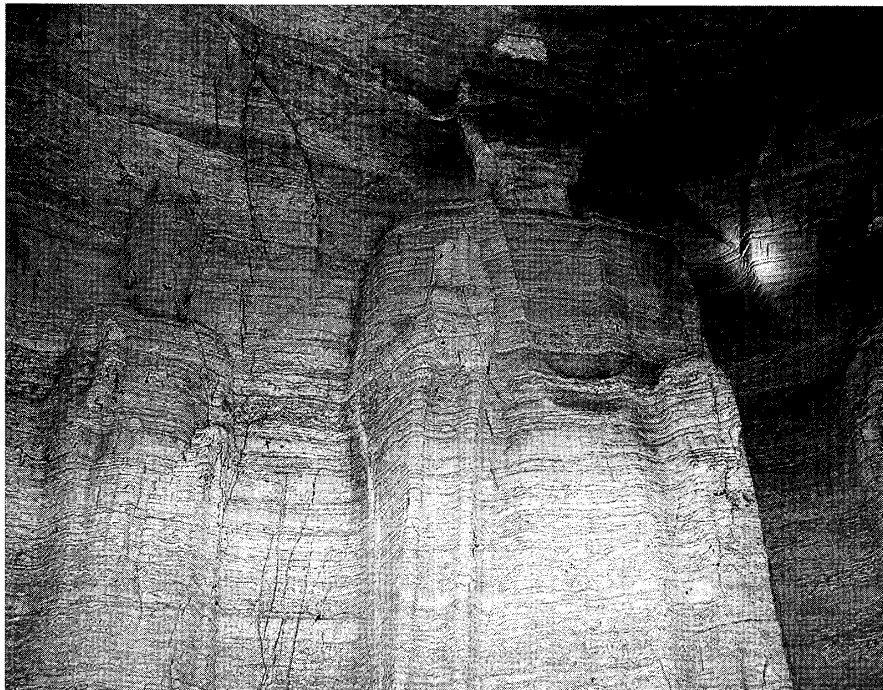


写真7 第1洞第2龕の拡大

右手は施無畏，左手は与願印。左右の脇侍菩薩像は共に，左手は垂下して持物を執り，右手は胸前で蓮蕾を握る。どちらも頭は高冠をかぶり，舟形光背が浮き彫りされている。着衣はX字上天衣か。反花座の上に立つ。

第3龕は立像の如来独尊で，脇侍は無い（写真8）。像高約4m。高髻。光背は舟形光背。着衣は第1龕と同じである。右手は施無畏，左手は与願印と思われる。仏像の右側に明の万暦二五年（1597）にここを訪れた人物の題記がある（写真9）。

関野氏は如来の尊格をすべて釈迦如来とし，年代も隋代としている⁽⁶⁾。李氏も北朝末から隋としているが，如来の尊格には薬師仏や阿弥陀仏も含まれるかもしれないとしている⁽⁷⁾。この3軀の大仏は着衣や手印がほとんど同じであるが，ただ第3龕のみ脇侍菩薩をつれていない。このことから，この大仏を弥勒仏と考えられないだろうか。そうすると，過去・現在・未来の如来という三世仏の組み合わせとなる。また，3軀の如来大仏像がいずれも高髻を結び，僧祇支と紐付きの内衣の上に袈裟を双領下垂にまとう中国式着衣であること，3龕とも舟形光背を背負っていることなどから，年代は北魏末から東魏代と考えられる。

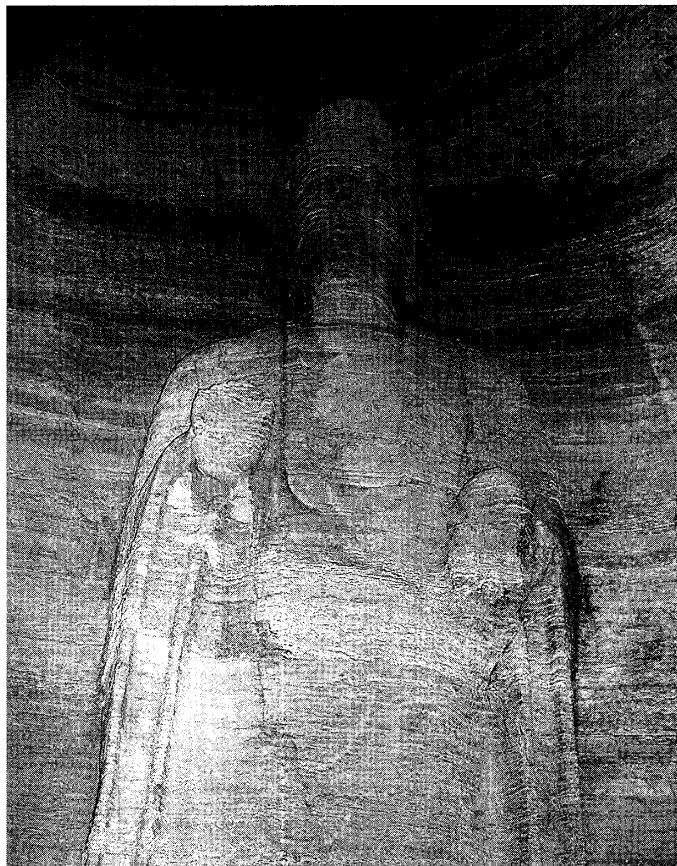


写真8 第1洞第3龕

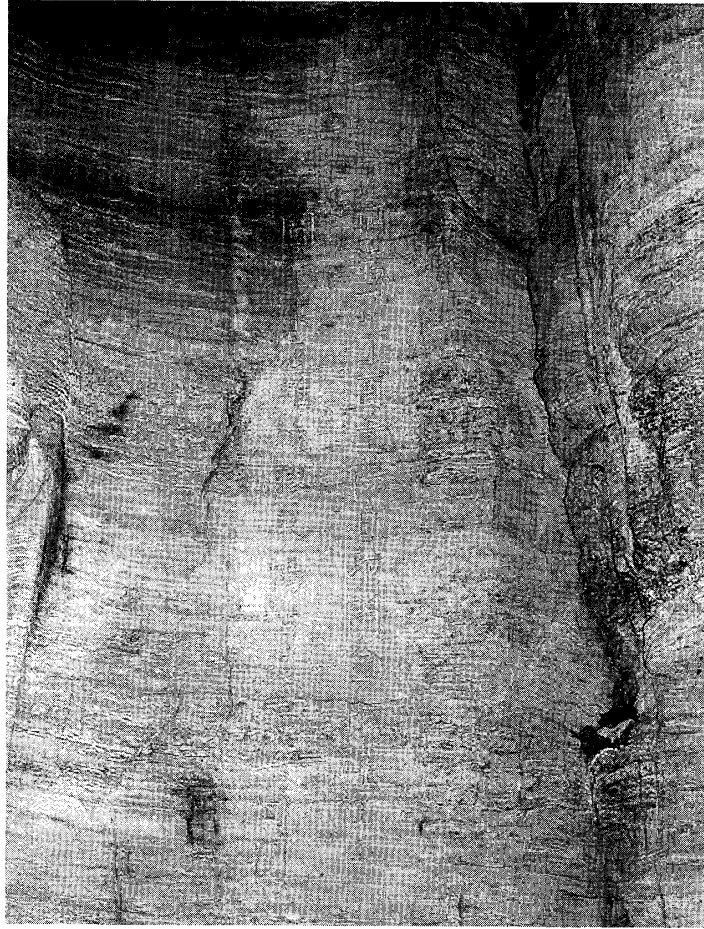


写真 9 第1洞第3龕の題記

(2) 第 2 洞

第2洞は、洞窟の東西両壁に仏龕が彫られている。関野氏は開窟された年代を隋代と推測する⁽⁸⁾。風化による摩滅がひどく、衣文などの特徴が分かりづらいが、一光三尊形式のような北魏末から東魏にかけて河北地域や河南北部に見られる様式があることから、第1洞の仏像とほぼ同じ頃の北魏末から東魏代かと思われる。

はじめに東壁である。第3龕以降はとくに摩滅が激しい(写真10)。ほとんどが如来立像で、単体か脇侍菩薩を1軀ともなったものである。西壁では6つの仏龕が確認できたが、やはり摩滅がはなはだしい(写真12)。また入り口に方形の龕があり、その下に二つの題記があるが(写真13)、文字ははっきりしない。これらは関野氏、李氏いずれの論文にも報告されていない。両方とも年紀も不明である。

東壁の第1龕は尖拱型の龕内に如来独尊立像で(写真11)、双領下垂式で衣文の模様ははっきりと浮き彫りされている。施無畏与願印で、頭部に光背がある。第2龕は頭部、両手とも欠損している。着衣も摩滅しているが、双領下垂式と思われる。舟形の龕で、右側

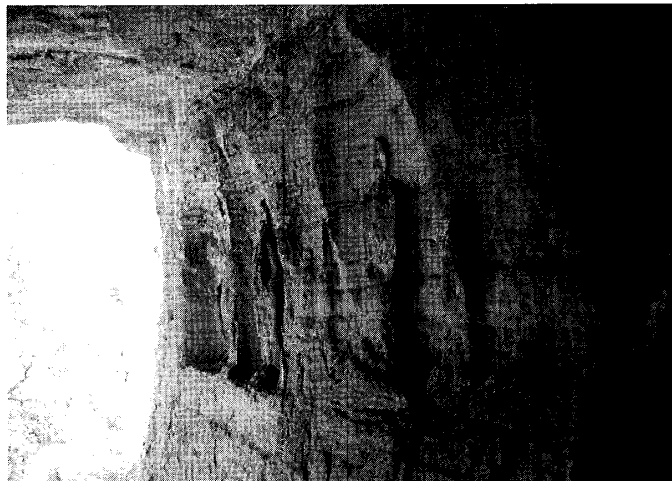


写真 10 第 2 洞東壁

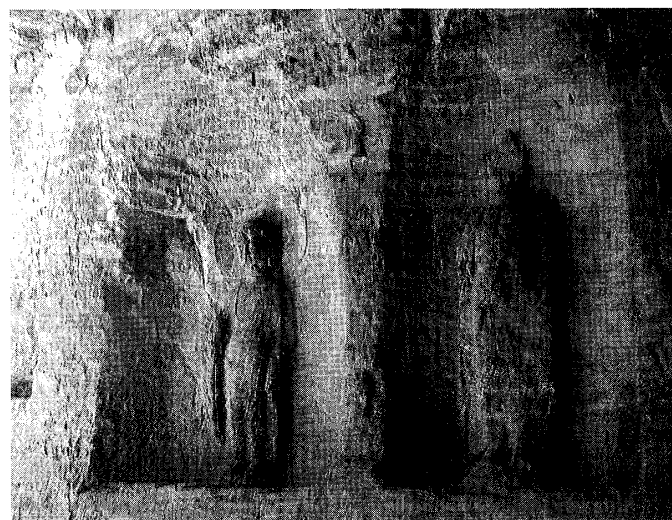


写真 11 第 2 洞東壁の拡大



写真 12 第 2 洞西壁



写真 13 第2洞西壁入り口部分の題記

に脇侍菩薩が1軀見えるが、摩滅がはなはだしい。第3龕は小型の二仏の龕であるが、摩滅がひどく、倚坐か、並立かはっきりしない。第4龕も如来立像で舟形光背を持つが、中尊の前面が削られ、着衣や手印は不明。右側に脇侍菩薩が1軀見えるが、やはり摩滅がはなはだしい。第5龕は如来独尊立像で舟形光背をもつ。中尊の上半身の前面が削られるが、頭部には高髻の痕跡がある。第6龕は2軀の立像であるが、やや大きな左側が如来立像で、頭部は欠損しているが、双領下垂式と思われる袈裟を着ている。右側はやや小さく、高冠を被った菩薩立像であるが、着衣等は分からない。

西壁の第1龕は単体の仏立像である。李氏は未完成としているが、頭部の破損状況から考えるとそうは思えない。第2龕は如来独尊の立像である。頭部は欠損している。両手も失われているが、右手は施無畏印と思われる。下側の袈裟の衣文がはっきり浮き彫りされている。裙を着ける。第3龕は如来と脇侍菩薩の2軀の立像である(写真14)。中尊は頭部、両手とも欠損。袈裟は右肩にかかって、胸前を空け大きくたるみをつくりながら左腕にかかる形式である。左側の脇侍菩薩は摩滅している。第4龕は如来三尊立像。施無畏与願印か。頭部は不明。着衣も袈裟を右肩にかけて、左腕にかけていることがわかる程度である。両側の脇侍菩薩も摩滅している。第5龕も三尊像だが、中尊は襟を打ち合わせる大衣を着ており、頭にも宝冠を被っているように見える。施無畏与願印で、倚坐の弥勒菩薩と思われる。両側の脇侍菩薩とも外側の手を胸前に持ってきている。第6龕は、仏像を掘り出しただけで、未完成である。

第2洞の入り口西側に二つの摩崖窟がある(写真15)。入り口のすぐ右側にある弥勒龕は単体の如来立像を作る(写真16)。如来の尊格は龕の下にある題記によって弥勒仏であることが判明する。仏像は頭部と両手の一部を欠損するが、右手は施無畏、左手は与願印と思われる。着衣は、袈裟が右肩にかかって胸前を空け、大きくたるみをつくりながら左

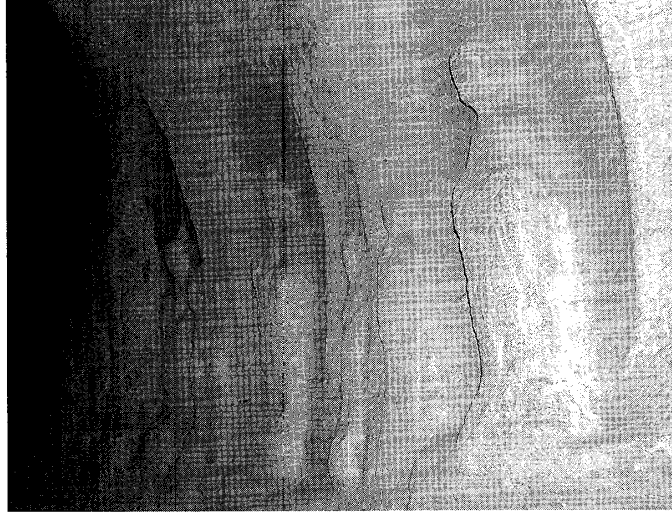


写真 14 第2洞西壁の拡大

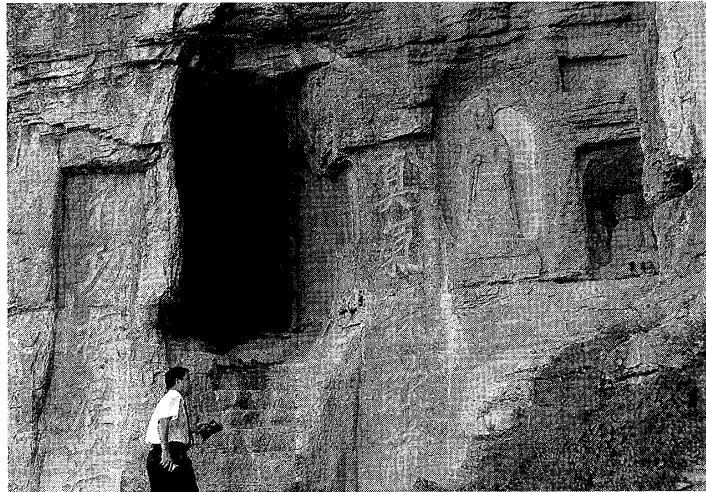


写真 15 第2洞入り口



写真 16 第2洞西側の摩崖

腕にかかる形式。内衣などは不明。袈裟は足まで下り、足が隠れる。反花座上に立つ。また、題記から、この弥勒龕は東魏天平四年（537）に造営されたことが分かる（写真 17）。おそらくこれが龍洞で最古の仏像と思われる。残念ながら、題記部分は風化が進み、3分の2程度が欠失している。いま、清の乾隆年間に刊行された『歴城県志』巻 23 に「龍洞造像記」として著録されている題記文を挙げると、次の通りである（以下、本稿では「天平四年題記」と略称する）。

大魏天平四年歲次（缺）朔廿□日庚申，使持節（缺）侍・驃騎大將軍・關（缺）尚書・（缺）涇涼華□南（缺）九州刺史・汝陽王□叔□，敬んで彌勒像一軀を造る。（缺）七曆，皇祚は永隆，四□□生の類，普く正覺に登らんことを。車騎將軍・左光祿大夫・（缺）州長史乞伏銳，征北將軍・金紫光祿大夫（缺）…

大魏天平四年歲次（缺）朔廿□日庚申，使持節（缺）侍・驃騎大將軍・關（缺）尚書・（缺）涇涼華□南（缺）九州刺史・汝陽王□叔□，敬造彌勒像一軀。（缺）七曆，皇祚永隆，四□□生之類，普登正覺。車騎將軍・左光祿大夫・（缺）州長史乞伏銳，征北將軍・金紫光祿大夫（缺）

今回の調査で、現存する題記を実見した際、「左光祿大夫」の下に「挺」という字があった。

もう一つの元延祐五年窟は、龕内に 1 軀の如来坐像と、その両側に 2 比丘と 2 菩薩、象と獅子に乗る菩薩（あるいは天王か？）の像を置く（写真 18）。如来は禪定印を結ぶ。龕のそばに元の延祐五年（1318）の題記がある。

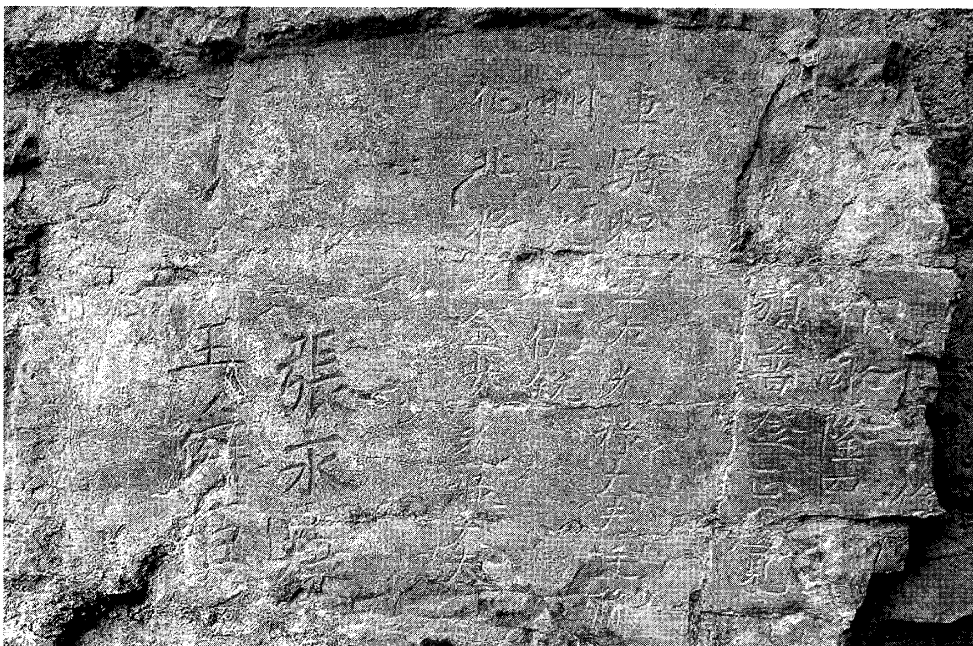


写真 17 弥勒仏龕下の題記



写真 18 元延祐五年窟

(3) 第 3 洞

第3洞は東向きに開いた洞窟である（写真19）。南北両壁に仏像が彫られ、北壁は全部で4組、計10軀の仏像が、南壁は2軀の仏像がある。関野氏、李氏とも隋代のものとするが⁽⁹⁾、仏像の体つきからもっと後代のものかもしれない。

北壁の仏像は、どれも像高がほぼ80 cm 程度である（写真20）。入り口からまず第1組が三尊の坐仏像である。3軀とも頭部がほぼ損壊するが、高髻の痕跡はある。袈裟は胸元でU字形を作りながら左腕にかける形式で、内衣の胸元に結紐が見える。左側の如来は

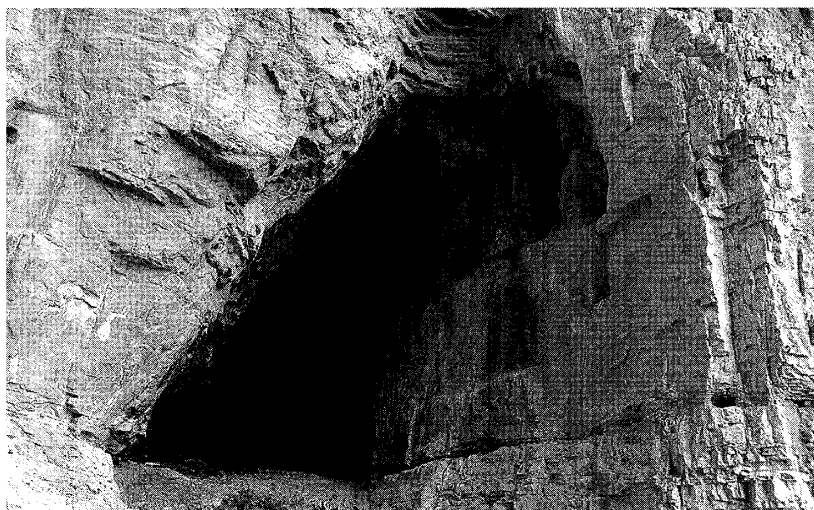


写真 19 第3洞入り口



写真 20 第 3 洞北壁

禪定印を結び、中央の如来は両膝上にそのまま置くが、右側の如来は不明。共に裳懸座を作り、足は隠す。中央の第 2 組は、一仏二菩薩の三尊像である。中尊は、頭部が損壊しているが、高髻の痕跡がある。袈裟は、胸元が U 字形の衣文を重ねている。両手は膝元で拱手する。右側の菩薩像は頭の真ん中に化仏が着いた宝冠を被る。両菩薩とも胸元に瓔珞を着けている。胸元には結紐が上下二段あり、僧祇支と両肩を覆う紐付きの衣を着けていると思われる。3 軀とも下半身の衣は薄く体に密着し、両膝頭が丸く透けて見えている。第 3 組は単体の如来坐像である。頭部は高髻。袈裟は偏袒右肩である。一番奥の第 4 組は 3 軀の如来坐像であるが、両側の仏像は倚坐。いずれも袈裟は胸元で U 字形を作りながら左腕にかける形式で、内衣の胸元に結紐が見える。中尊は禪定印と思われる。左側の仏像は左手が与願印だが、右手は不明。右側の仏像は左手を膝上に置き、右手は不明。中尊の下側には一坐仏二菩薩立像の三尊像がある。

南壁の仏像は 2 軀あるが、いずれも結跏趺坐をし、禪定印を結ぶ。入り口に近い側が菩薩像で、着衣は第 2 組の菩薩とほぼ同じである。もう 1 軀は如来像で、こちらも着衣は第 2 組の中尊像とほぼ同じである。

また、洞窟の入り口上方に上下 2 層の摩崖龕がある（写真 21）。上層には二つの仏龕が作られ、いずれも一坐仏二菩薩の三尊像である。下層には二仏並坐像の仏龕が一つ作られている。

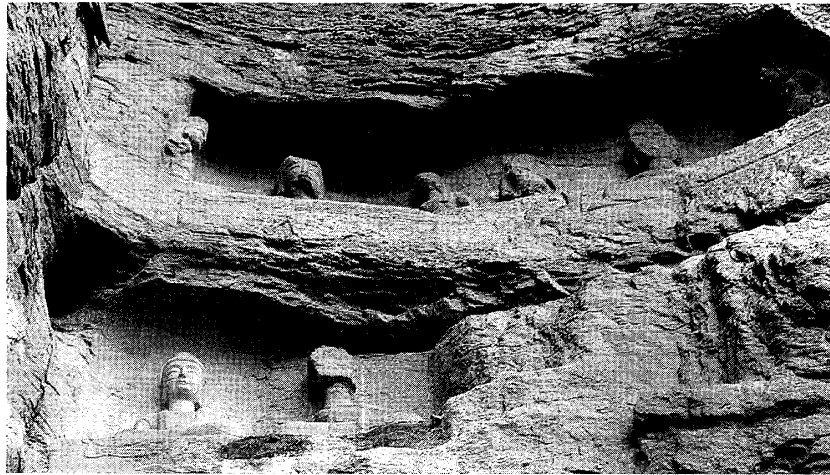


写真 21 第3洞入り口上方の仏龕

(4) 洞外の摩崖

第3洞の北側15mのところには仏龕が一つ作られている(写真22)。龕内には、一坐仏二比丘二菩薩の五尊像がある。中尊は、頭部が損壊しているが、高髻の痕跡がある。僧祇支を着け、胸前に結紐をつけた內衣を着け、袈裟を着る(写真23)。袈裟は右肩にかかり、胸前を空け大きくたるみを作りながら左腕にかける、雲岡第6窟の着衣形式である。結跏趺坐をし、裳懸座を作り、足は隠す。両比丘像とも頭部は損壊している。左側の比丘は左手で環状の持物を胸前に持ち、右手で蓮蕾を握る(写真24)。右側の比丘の両手は損壊。両菩薩とも右手を胸前に置き、左手は下に垂らして環状の持物をもつ。左肩から璎珞をかける。內衣は不明、裙を着け、片側だけ天衣を着ける。龕外の左側に連珠状の柱の一部が残る。

中尊の尊格を関野氏は釈迦如来とし、李氏は薬師如来か、阿弥陀如来とする⁽¹⁰⁾。北朝

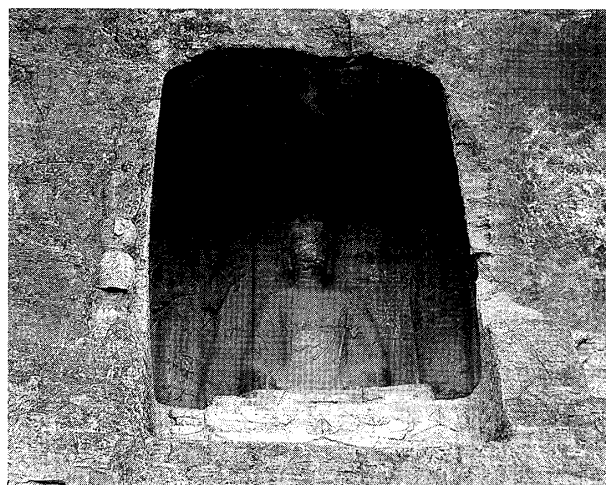


写真 22 洞外の五尊仏龕

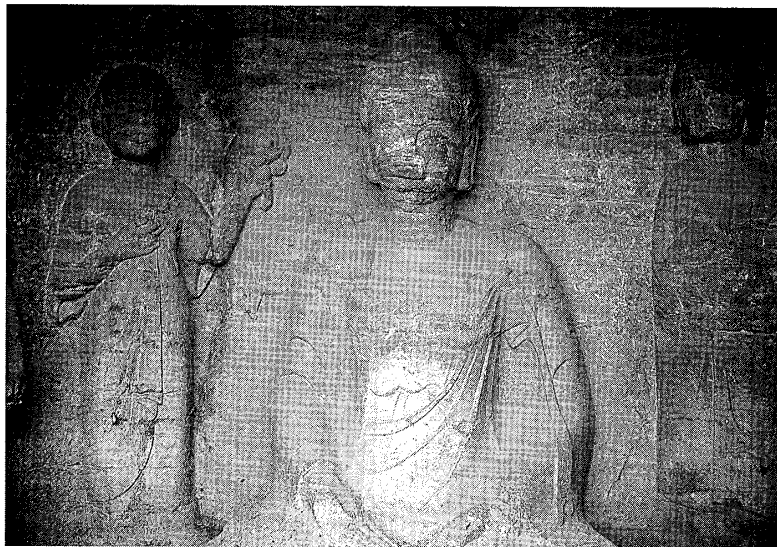


写真 23 五尊仏龕の中尊

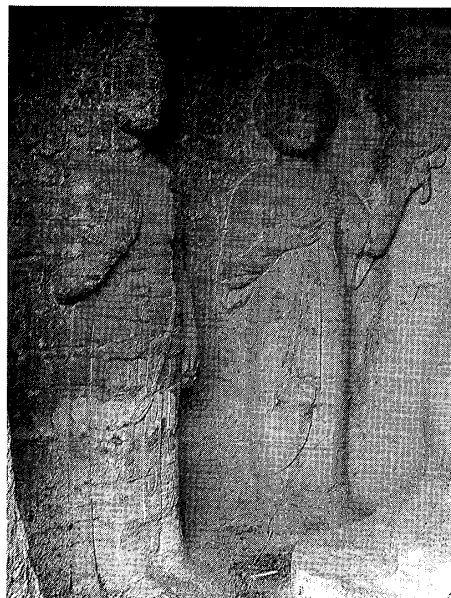


写真 24 五尊仏龕向かって左側

では五尊形式が河南を中心に流行したが、その場合、中尊は釈迦如来が配される⁽¹¹⁾。この五尊も同様と考えてよいのではないだろうか。関野氏は隋代とする⁽¹²⁾。

また、関野氏によれば、この仏龕の北側にさらに一つの小仏龕があり、釈迦如来の立像があったとするが、現在では足の部分しか残っていない。その北側に獅子像の陰刻があったとするが、見つからなかった。

以上、龍洞石窟の現状についてまとめてきた。龍洞石窟は、第2洞入り口にある弥勒龕下の題記が東魏天平四年（537）の年紀を持つことから、おそらく東魏代に開窟されたと

思われる。また造像様式により、現存するほとんどの仏像も北朝末から隋代までに造営されたものであろう。次に、龍洞の造像の特徴について述べていくこととする。

二、龍洞石窟の特徴

龍洞石窟では、第1洞第3龕や第2洞入り口の弥勒龕のように、弥勒が如来形で造像されている点が特徴として挙げられるだろう。石松日奈子氏によれば、山東地方に菩薩形ではなく如来形の弥勒が多くなる要因として、5世紀から隣接する河北で如来形の弥勒が多く造られ、菩薩形の交脚像が定着せず、山東もその影響を受けたとする⁽¹³⁾。さらに、如来と脇侍菩薩の一光三尊形式も多い。第1洞の第1龕と第2龕のような大型造像だけでなく、第2洞の東西壁に浮き彫りされた小型の造像の中にも見られる。これも隣接する河南北部や河北地方の特徴とも一致する⁽¹⁴⁾。

第2洞に関してユニークなのは、西壁の第5龕が倚坐の弥勒菩薩を中尊とする造像だということである。石松氏によれば、弥勒菩薩倚坐像は陝西を中心とする北魏西部地域に広まった形式であり、東西分裂後も西魏では弥勒菩薩倚坐像が引き続き作られるのに対し、東魏では作例が見られない⁽¹⁵⁾。とすれば、龍洞第2洞は極めて珍しい作例となろう。

また、第1洞内の3軀の巨大な仏立像からは、山東地方独自の信仰を見ることができる。すなわち、臨淄にある康天寺大仏や西天寺大仏、青島市博物館蔵の4軀の大仏のような、5～6メートルに及ぶ北朝期の仏立像が点在しており、山東地方では巨大仏を崇拝する信仰があったとされる。龍洞石窟第1洞の大仏にも同様の信仰をうかがえるだろう。

龍洞石窟の造像の特徴をまとめると次のようになる。まず、龍洞の仏像様式には隣接する河北や河南と同様のモチーフが見られる。例えば、龍洞には一光三尊像や如来形の弥勒が多く、これらの特徴は隣接する河北地域や河南北部と共通する。一光三尊形式の造像様式は北魏末期に河北や河南北部に広がったが⁽¹⁶⁾、同様の様式が東魏天平年間に開窟した龍洞石窟でも作られているということである。このことから、河北や河南の造像様式があまり時間をおかずに山東にも及んでいるという、造像様式の伝播の流れも見えてくるのである。同時に、その一光三尊形式の造像を龍洞の第1洞では巨大仏で表現しており、これは大仏信仰をもつ山東地域の特徴であろう。このように、河南や河北に端を発して、当時普遍的に見られた仏教造像の様式が作られ、そこに山東独自の様式も取り入れるという、両方の要素がまじり合った形で表現されているのである。

では、東魏時代に龍洞石窟はどういった人たちによって造営されたのか。次章では、題記を手がかりに、当時の齊州地域の状況から龍洞石窟造営の背景について検討したい。

三、龍洞石窟造営の背景——北魏末・東魏初の齊州地域

(1) 済南の黄石崖石窟との関係

龍洞石窟の造営の背景を考えるには、同じく済南市にある黄石崖石窟が大きな手がかりを与えてくれる。黄石崖石窟は、済南市の南3kmにある螺絲頂山の山頂西側にある。西北には済南市南郊にある千仏山があり、龍洞は黄石崖の東南にある。近年黄石崖石窟を調査した張氏と岡田氏の報告によれば、黄石崖の仏教造像には天然の洞窟を利用した大龕一つがあり、その他に28の小龕と北魏正光年間から東魏興和年間までの造像題記7件がある⁽¹⁷⁾。題記にはもう一つ、東魏元象二年(539)の紀年をもつ「齊州長史乞伏鋭造弥勒像記」があり、『八瓊室金石補正』巻18や民国『続歴城県志』巻31などに著録されているが、残念ながら現存していない。現存する題記の中で最も早いものは「北魏正光四年(523)七月廿九日法義兄弟姉妹等石窟像廿四軀記」であり、黄石崖が北魏の正光年間に開窟されたことが判明する。おそらく、山東省内の石窟で最古のものと思われる。黄石崖の仏像様式も隣接する河南や河北の様式を取り入れつつ、山東独自の様式を取り入れた形式になっているという⁽¹⁸⁾。張氏は造像題記に記された人名から、黄石崖の造像の施主は北魏や東魏の皇室や高官といった上層の人たちではなく、僧侶や中下層の官吏、および邑義という信仰団体を結成した信徒たちだと推測する⁽¹⁹⁾。

では、黄石崖石窟がどのように龍洞石窟と結びつくのか。石窟に刻まれた題記の中に、そのことを示す記録がある。まず、東魏元象二年の題記の文中には、龍洞の天平四年題記と同じ人物が登場する。『八瓊室金石補正』巻18・「黄石崖造像三段」・「齊州長史乞伏鋭題記」によって題記の全文を挙げておく。

大魏元象二季歳次乙未三月廿三日、車騎將軍・左光祿大夫・齊州長史・鎮城大都督・挺縣開國男乞伏鋭、昔賊難に値い、年々常に像を造り、以て慈恩に報いんことを願う。今謹んで家資を竭くし、敬んで彌勒石像一堪を造り、山に依り營構し、妙瑜神造す。仰ぎ願わくは帝祚は永隆し、宰輔は傑哲、次に願わくは七世父母、浄土に托生し、佛に値い法を聞かんことを、願わくは居家眷屬、命は延び位は崇く、常に善會に與し、
遠及び含生同に法律に沐し、毘樓舍兒に息まんことを。

大魏元象二季／歳次乙未三月／廿三日、車騎將／軍・左光祿大夫・／齊州長史・鎮城
／大都督・挺縣開／國男乞伏鋭、昔／値賊難、願年常／造像、以報慈恩。／今謹竭家
資、敬／造彌勒石像一／堪、依山營構、妙／瑜神造。仰願　／帝祚永隆、宰輔／傑哲、
次願七世／父母、托生浄土、／値佛聞法、願居／家眷屬、命延位／崇、常與善會、遠

／及含生同沐法／律， 息毘樓舍兒…

この文中にある「車騎將軍・左光祿大夫・齊州長史・鎮城大都督・挺縣開國男乞伏銳」が、龍洞石窟第2洞の洞外弥勒仏龕下の東魏天平四年題記にある「車騎將軍・左光祿大夫・（缺）州長史乞伏銳」と同一人物である。すなわち、龍洞と黄石崖の造営には、ともに乞伏銳という人物が関わっていることが分かる。そして、黄石崖の元象二年題記から、おそらく龍洞の天平四年題記の「□州長史」も「齊州長史」であり、天平四年の時点ですでに乞伏銳は齊州長史となっていたと思われる。

さらに、黄石崖に現存する孝昌二年（526）九月八日の帝主元氏法義卅五人題記には、「帝主元氏法義」という邑義のメンバーの名前が列挙され、この中に鄧恭伯という人物が挙がる。張氏によれば、天平四年題記の最後にある「征北將軍・金紫光祿大夫（缺）」とは鄧恭伯のことだという⁽²⁰⁾。鄧恭伯については、『魏書』巻24・鄧淵伝に記述がある。恭伯は道武帝期に活躍した鄧淵の曾孫にあたるが、『魏書』には恭伯自身について「（鄧靈奇の）子の恭伯，右光祿大夫たり」と記すのみである⁽²¹⁾。ところが、鄧恭伯の妻である崔令姿の墓誌が発見され⁽²²⁾、その墓誌蓋には「大魏征北將軍・金紫光祿大夫・南陽の鄧恭伯の夫人，崔氏の墓誌銘」とあり⁽²³⁾、龍洞の天平四年題記の記述と一致する。

では、鄧恭伯は石窟のある齊州地域とどのような関わりをもっているのか。このことについて、龍洞や黄石崖の石窟題記、「崔令姿墓誌」には明らかではない。しかしながら、『魏書』巻24・鄧淵伝によると、鄧淵の一族は北魏の孝文帝期より次々と齊州の刺史や長史を輩出している。鄧淵の子鄧穎の系統では、鄧穎の孫の鄧述が北魏の孝文帝太和十七年（493）の時に齊州刺史となっており、鄧淵の子鄧顥の系統では、鄧顥の子、すなわち鄧恭伯の父親の鄧靈奇も、時期は不明であるが、やはり齊州刺史となっている⁽²⁴⁾。また鄧顥の系統には、鄧顥の孫の鄧羨が孝文帝期末の太和二二年（498）より次の宣武帝期まで齊州長史に就任し、「治に在ること十年，三刺史を経て，清勤を以て著称」（『魏書』巻24・鄧淵伝附羨伝）されている。このように、鄧淵の一族は、孝文帝期から宣武帝期にかけて齊州の地方官を輩出し続けたのである。齊州一帯は、献文帝皇興三年（469）に北魏に征服されてからしばらくは、在地豪族を中心に不穏な情勢にあり、孝文帝期に入っても豪族による反乱や南朝への帰属が続いたが、とくに太和七年から十二年まで齊州刺史となった韓麒麟の尽力で、孝文帝の太和年間中期以降は齊州地域も落ち着きを取り戻した⁽²⁵⁾。鄧氏の一族が齊州で次々と地方官にしたのは、ちょうどこの時にあたる。おそらく鄧氏は、一族の地方官就任に伴って齊州に移り住んだのではなかろうか。その後、地方官歴任という実績によって、齊州で一定の影響力を持つようになったと思われる⁽²⁶⁾。

以上、龍洞と黄石崖の両方の石窟題記に名前のある乞伏銳と鄧恭伯について検討し、乞

伏鋭は龍洞石窟の造営時に齊州長史であり、鄧恭伯は代々齊州で地方官を輩出した一族であることが分かった。しかし、龍洞の天平四年題記以外に、残念ながら両者の直接の結びつきを示す記事は見出せなかった。

龍洞の天平四年題記には、上記の二人の他にもう一人名前が挙がっている。そこで、節を改めて題記の冒頭にある人物について検討を加え、その上で、この三人が龍洞石窟を開窟した背景について明らかにしたい。

(2) 汝陽王元暹の齊州刺史就任

龍洞の天平四年題記の冒頭に出てくる「使持節（缺）侍・驃騎大將軍・關（缺）尚書・（缺）涇涼華□南（缺）九州刺史・汝陽王□叔」について、張総氏は題記中の「汝陽王」の字から、北魏宗室の汝陽王元暹（字叔照）にあたると指摘する⁽²⁷⁾。たしかに、『魏書』卷19上・景穆十二王列伝第七上・京兆王伝附元暹伝によれば、元暹は京兆王元子推の孫にあたる人物で、孝莊帝の時に南兗州刺史と秦州刺史、元恭の普泰元年（531）に涼州刺史となっているが、列伝には元暹と龍洞がある齊州との関わりを示す記述はない⁽²⁸⁾。だが、『魏書』卷80・侯淵伝にこのような話がある。

永熙の初め、〔侯淵は〕齊州刺史に除せられ、餘は故の如し。出帝の末、淵は兗州刺史樊子鵠・青州刺史東萊貴平と密信もて往來し、以て相連結し、又た間使を遣わし誠を獻武王（高歡）に通ぜしむ。出帝の關に入るに及び、復た顧望を懷う。汝陽王暹既に齊州刺史に除せられ、城西に次し、淵部を擁し城に據り、時に迎納せず。民劉桃符等潛かに暹を引き入れて西城に據らしめ、淵門を爭うも克てず、騎を率いて出奔し、妻兒部曲は暹の虜とする所と爲る。行きて廣里に達し、會たま承制して淵を以て青州の事を行わしむ。

永熙初、〔侯淵〕除齊州刺史、餘如故。出帝末、淵與兗州刺史樊子鵠・青州刺史東萊貴平密信往來、以相連結、又遣間使通誠於獻武王（高歡）。及出帝入關、復懷顧望。汝陽王暹既除齊州刺史、次於城西、淵擁部據城、不時迎納。民劉桃符等潛引暹入據西城、淵爭門不克、率騎出奔、妻兒部曲爲暹所虜。行達廣里、會承制以淵行青州事。

上記によれば、永熙の初め侯淵は齊州刺史だったが、出帝、すなわち孝武帝が彼を擁立した高歡のもとから出奔し、関中にいた宇文泰のもとに身を投じた頃に、元暹が齊州刺史に任命されたという。おそらく、この齊州刺史就任が元暹の龍洞石窟の造営参加のきっかけになっていると思われる。

ところで、上掲の『魏書』卷80・侯淵伝の記事では、前任者である侯淵が元暹の齊州刺史赴任を拒んで城に立て籠もったが、齊州の城民＝州兵の劉桃符らが元暹を齊州城の西

城に引き入れたため⁽²⁹⁾、侯淵は齊州から出奔し、広里まで行った時に青州の統治を命令されたという。また、同じ時期に兗州刺史樊子鵠も高歓に反旗を翻し、羊深を齊州刺史に任命している⁽³⁰⁾。このように、当時、齊州刺史をめぐる元暹・侯淵・羊深の三つの勢力が対立する状態になっていた。では、なぜこのような混乱が起きたのか。この背後には、永熙三年（534）に、孝武帝が高歓からの掣肘を嫌って都の洛陽から脱出した事件が関わっていると見られる。この事件をきっかけに、華北は東西二政権に分裂されることになった。そこで、孝武帝の出奔前後について略述した上で、元暹の齊州刺史就任時の政治状況を明らかにし、龍洞石窟造像の歴史的背景を検討することにしたい。

もと爾朱栄の武将であった高歓は、普泰元年（531）二月に冀州の信都に入り、六月に渤海太守の元朗を皇帝に立てて爾朱氏に反旗を翻した。そして、翌年閏二月に韓陵の戦いで爾朱氏一族を破って、洛陽に入った。この時、北魏の皇帝には、高歓が立てた元朗の他に、爾朱氏が擁立した元恭がいた。高歓は二人の皇帝とともに廃して、四月に孝武帝を推立したのである。それから、高歓は鄴に戻り、七月には爾朱兆を討って晋陽に入り、大丞相府を建てて自らの拠点とした。

高歓と洛陽にいる孝武帝との対立は永熙二年（533）より本格化する。侍中の斛斯椿は、高歓が爾朱仲遠帳下の喬寧・張子期を斬ったことにより、禍が自分にも及んでくることを恐れて、元宝炬・元毗・王思政らと共に、孝武帝に高歓の誅殺を勧めた。これをきっかけに、洛陽の朝廷では高歓対策が次々と実行に移された。一方、関中大行台の賀拔岳が長安を拠点に関中を一つの勢力にまとめつつあった。これに対して、高歓は賀拔岳の部将で秦州刺史の侯莫陳悦と密約して賀拔岳を殺させた。しかし、賀拔岳の麾下は侯莫陳悦に従わず、夏州刺史宇文泰を盟主に迎え入れる。宇文泰は岳の余衆を統べ、侯莫陳悦を討って仇を報じた。永熙三年四月、孝武帝は使者を遣わして宇文泰に驃騎大將軍・開府儀同三司・関西大都督を授け、さらに六月には尚書僕射・関西大行台を兼任させた。

長安の宇文泰との関係から、高歓は洛陽から鄴への遷都を考えるが、高歓から掣肘されることを嫌った孝武帝は同意せず、七月、孝武帝は洛陽から宇文泰のもとへ脱出した。高歓は帝を追跡したが及ばず、やむなく元善見を立てて（孝静帝）鄴への遷都を断行した。こうして、孝静帝を奉ずる高歓と、孝武帝を長安に迎えた宇文泰と、東西両魏が分立することになったのである。

さて、先述したように、孝武帝の洛陽脱出時、齊州刺史をめぐる混乱が起こったが、その理由について考えたい。前任者の侯淵であるが、前掲した『魏書』巻80・侯淵伝によれば、隣接する兗州の樊子鵠・青州の元貴平とひそかに連絡を取って関係を結び、同時に、高歓にも使者を送ってよしみを通じていた。そして、孝武帝が関中へ出奔すると、形

勢がどうなるか、様子見をしていたという。要するに、侯淵は、樊子鵠や元貴平と高歡のどちらの側につくか、両者を天秤にかけていたのである。

ちょうどその時に、元暹が齊州刺史となって齊州に赴任してきた。では、元暹に齊州刺史を命じたのは誰か。これについては、『資治通鑑』巻156・梁紀12・武帝中大通六年(534)冬十月条によれば、

孝武帝の關に入るに及び、清河王亶制を承け、汝陽王暹を以て齊州刺史と爲す。

及孝武帝入關，清河王亶承制，以汝陽王暹爲齊州刺史。

とあるように、出奔した孝武帝の代行として清河王元亶が命令を出したのである。また、侯深に行青州事を命じた「承制」も、同書胡三省注に「命の清河王亶より出ずるを言う」とあるように、清河王元亶によるものである。元亶による承制は、高歡が百官と会議をして決めたものであり⁽³¹⁾、元亶が出す命令も、おそらく高歡の了解のもとで行われていたと思われる。だからこそ、侯淵に対して高歡が青州に赴任するよう勧めた手紙を出したのであろう⁽³²⁾。侯深も青州への転任という措置に高歡の影響を察知したからこそ、元亶への抵抗という選択肢をとらず、青州に向かったのではないか。

そして、青州には侯淵と結びつきのある元貴平が刺史をしていたが、元貴平について、次のような記述がある。

而るに貴平は自ら斛斯椿の黨を以て、亦た代を受けず。〔『魏書』巻80・侯淵伝〕

而貴平自以斛斯椿黨，亦不受代。

元貴平は斛斯椿のグループに属するので、元亶が命じた青州刺史の交代を受け入れなかったという。つまり、元貴平は、先述した孝武帝ら朝廷側の中心人物である斛斯椿のグループに属し、高歡とは対立する関係にあったのである。結局、元貴平は侯淵に敗れ、殺害されてしまう。また、侯淵も、

淵自ら惟れ反覆するも、獲安せざるを慮り、遂に貴平を斬り、首を京師に傳え、斛斯椿と同じくせざるを明らかにせんと欲す。(同上)

淵自惟反覆，慮不獲安，遂斬貴平，傳首京師，欲明不同於斛斯椿也。

とあり、斛斯椿の側に属していない、すなわち高歡と対立するつもりがないことを明らかにするために、元貴平を殺害したという。逆に言うと、孝武帝の出奔以前は、侯淵も元貴平と同じく斛斯椿とも結びつきがあったと考えられる。侯淵は、孝武帝・斛斯椿と高歡との形勢を比べて高歡が有利と判断すると、すぐに歡の側に身を移し、斛斯椿グループの元貴平を殺害したのである。

では、侯淵が密かに交流していたもう一人の樊子鵠を見ると、斛斯椿と直接交流があったとする記事は見つからない。しかしながら、彼も孝武帝の出奔に呼応して高歡に対

抗し、兗州城で反乱を起こした。『魏書』巻80・樊子鵠伝に、

出帝の關に入るに及び、子鵠城に據り逆を爲す。南青州刺史大野拔・徐州人劉粹各おの衆を率いて子鵠に就く。天平の初め、儀同三司婁昭等を遣わし衆を率いて之を討たしむ。

及出帝入關、子鵠據城爲逆。南青州刺史大野拔・徐州人劉粹各率衆就子鵠。天平初、遣儀同三司婁昭等率衆討之。

とあり、挙兵時には隣接の南青州刺史の大野拔も反乱に参加している。また、先述したように、樊子鵠はこの時に羊深を齊州刺史に擁立しており、羊深も兗州の泰山郡博平県で塁を築き、樊子鵠の反乱に参加した。このように、樊子鵠を中心に兗州と南青州に孝武帝の洛陽脱出に呼応する動きが起こったのである。したがって、孝武帝の出奔前に、斛斯椿ら洛陽の朝廷勢力との間に何らかの結びつきがあった可能性が高い。しかし、齊州は前年に元暹が刺史となって着任しており、青州も高歓にうながされて侯淵が刺史となっていて、樊子鵠らの反乱がこれ以上広がっていくことはなかった。上述したように、孝武帝の出奔後すぐに高歓らが齊州と青州の刺史の人事に手を打ったからこそ、反高歓の動きがあまり広がらなかったであろう。

結局、天平二年正月に樊子鵠は大野拔に殺害され、羊深も東魏の軍隊に攻められて殺された。七月には、侯淵は青州刺史を罷免されたため、禍が自分に及ぶことを恐れて反乱を起こしたが、高歓の武将蔡儁に敗れて逃げる途中に殺害された。

以上、元暹の齊州刺史就任時の状況を概観した。元暹が齊州刺史となったのは、孝武帝が高歓の掣肘を嫌って関中へ脱出した時だった。孝武帝の出奔前の齊州・青州・兗州では、洛陽の孝武帝の側との間に何らかの結びつきがあり、これらの地域で孝武帝の出奔に呼応する動きが広がる可能性があった。永熙三年（534）七月、孝武帝の出奔後、高歓はすぐに手を打ち、元暹を齊州刺史に任じ、様子見をしていた齊州刺史の侯淵を青州刺史に遷すことで、齊州・青州・兗州で反高歓の動きが広がらないようにした。その結果、齊州では翌年の天平二年正月までには、混乱が終息したのである。

最後に、このような元暹の齊州刺史就任をめぐる状況から、龍洞石窟造像の背景を検討することにしたい。上述したように、元暹の齊州刺史就任は、北魏最後の孝武帝が高歓のもとから長安の宇文泰のもとへ身を投じた時にあたり、この時の齊州・青州・兗州には、孝武帝の出奔に呼応しようとする勢力（侯淵・元貴平・樊子鵠）があった。結果的には、高歓側が孝文帝の出奔後すぐに元暹を齊州刺史に任命し、侯淵を青州に遷すことで、斛斯椿のグループの元貴平を侯淵に殺害させることができ、兗州刺史の樊子鵠が高歓に反旗を翻した時も、反乱自体はそれほど大きな規模にならなかった。それでも、534年から535

年にかけて、齊州・青州・兗州は反乱鎮圧の戦場となっていた。齊州にも混乱の影響が及んでいたはずである。

齊州地域がようやく落ち着きつつあった天平四年（537）に、齊州刺史の元暹・齊州長史の乞伏鋭・在地豪族の鄧恭伯の三人によって開窟された石窟が、龍洞石窟である⁽³³⁾。では、彼らが一緒に石窟を造営したのはなぜか。ここでもう一度乞伏鋭と鄧恭伯を取り上げたい。黄石崖石窟にある元象二年の題記によれば、乞伏鋭の肩書きは「車騎將軍・左光祿大夫・齊州長史・鎮城大都督・挺縣開國男」であり、彼は齊州長史であると同時に鎮城大都督を兼任している。谷川道雄氏によれば、北魏末の豪族勢力は郷里内での郷兵の結集によって、北魏政権を支持する見返りに、刺史・郡守を要求して地方行政権を掌握すると共に、当州都督・当郡都督によって軍事権も有したという⁽³⁴⁾。これを踏まえれば、自分の勢力の及ぶ齊州の長史となり、鎮城大都督として郷兵を率いていた、齊州の豪族の乞伏鋭という姿が浮かび上がってくるのである。そして、鄧恭伯も、「征北將軍・金紫光祿大夫」の資格で郷兵を統率していた豪族であることが明らかとなる。

このような郷帥である乞伏鋭や鄧恭伯は、孝武帝の西遷による齊州・青州・兗州の混乱に際して、おそらく郷兵を率いて郷里を安定させる一方、東魏政権より派遣された齊州刺史の元暹を支持したのであろう。とするならば、元暹・乞伏鋭・鄧恭伯の三人による龍洞石窟の造営とは、政権側と齊州の郷兵集団との結合関係を形にして示したものと位置づけられるのである。では、なぜその結合関係を仏教石窟の造営という形で示したのか。一つは、龍洞に先立って北魏末に造営された黄石崖石窟を、乞伏鋭と鄧恭伯がそれぞれ造営していたことからうかがえるように、二人が熱心な仏教信者だったことが考えられる。もう一つの理由として、三人が共同して一つの石窟を造るという行為、またその結果できた石窟そのものによって、東魏政権との関係を齊州地域の人々に視覚的にうたえる効果もあったものと思われる。

おわりに

以上、山東省済南市にある龍洞石窟について、はじめにその現状を中心に述べ、続いて、龍洞石窟の造営に関わった元暹・乞伏鋭・鄧恭伯の三人についてそれぞれ検討し、龍洞石窟造営の背景について考察した。

はじめに、龍洞石窟についてまとめると、第2洞入り口にある弥勒仏龕下の題記が東魏天平四年（537）の年紀を持つことから、石窟は東魏代に開窟されたと考えられる。また現存するほとんどの仏像の造像様式も、北朝末から隋代までに造営されたものであった。

その龍洞石窟の造像の特徴として、まず、仏像様式には隣接する河北や河南と同様のモチーフが見られる。例えば、龍洞には一光三尊像や如来形の弥勒が多く、これらの特徴は隣接する河北地域や河南北部と共通する。ただし、その一光三尊形式の造像が、龍洞では巨大仏で表現されており、これは大仏信仰をもつ山東地域の特徴であろう。このように、河南や河北に端を発して、当時普遍的に見られた仏教造像の様式が作られ、そこに山東独自の様式も取り入れるという、両方の要素がまじり合った形で表現されているのである。

次に、龍洞石窟の東魏天平四年の題記にある三人について検討した。乞伏鋭は龍洞石窟の造営時に齊州長史であり、鄧恭伯は代々齊州で地方官を輩出した一族であることが分かった。そして、元暹は、北魏最後の孝武帝が高歡のもとから長安の宇文泰のもとへ身を投じた時に齊州刺史となった。当時は、齊州・青州・兗州には孝武帝の出奔に呼応しようとする勢力（侯淵・元貴平・樊子鵠）があったが、孝武帝の出奔後、高歡はすぐに元暹を齊州刺史に任じ、様子見をしていた齊州刺史の侯淵を青州刺史に遷すことで、齊州・青州・兗州で反高歡の動きが広がらないようにしたのである。そして、元暹と共に龍洞を開窟した乞伏鋭と鄧恭伯は、齊州において郷兵を統率した豪族であり、彼らは東魏政権成立期の混乱において、郷兵を率いて齊州を安定させると同時に、齊州刺史の元暹を支持したことが明らかとなった。齊州における政権側と齊州の郷兵集団との結合関係を背景に、龍洞石窟が造られたのである。

注

- (1) 岡田健「山東歷城黄石崖造像」(『美術研究』366号, 1997年), 張総「山東歷城黄石崖摩崖龕窟調査」(『文物』1996-4)。
- (2) 氣賀澤保規「中国華北の仏教石刻と遺跡の調査報告(2005年9月3日~12日)」(『駿台史学』130, 2007年)「Ⅲ-1 山東省済南市の龍洞石窟について」を参照。
- (3) 関野貞「山東省に於ける南北朝及び隋唐の彫刻(二)」(『國華』310, 1916年, のち『支那の建築と芸術』岩波書店, 1938年に所収)。
- (4) 戦後の報告としては、荆三林「済南近郊北魏隋唐造像」(『文物参攷資料』1955-9), および李清泉「済南地区石窟・摩崖造像調査與初歩研究」(『《法藏文庫》中国仏教学術論典』82, 高雄, 仏光山文教基金会, 2001年)。李清泉氏の論文は李氏が1996年に修士論文として提出したものである。
- (5) この着衣形式は、雲岡石窟第6窟のものと同一である。岡田健・石松日奈子「中国南北朝時代の如来像着衣の研究(上)(下)」(『美術研究』355号, 356号, 1993年)を参照。
- (6) 関野氏前掲注(3)論文。
- (7) 李氏前掲注(4)論文。
- (8) 関野氏前掲注(3)論文。
- (9) 関野氏前掲注(3)論文, および李氏前掲注(4)論文。

- (10) 関野氏前掲注(3)論文、および李氏前掲注(4)論文。
- (11) 石松日奈子「龍門石窟古陽洞造像考」(『佛教藝術』248号, 2000年)。
- (12) 関野氏前掲注(3)論文。
- (13) 石松日奈子「北魏時代の地方造像と民間造像—仏教造像の普及—」(同氏著『北魏仏教造像史の研究』(ブリュッケ, 2005年)所収)。
- (14) 石松日奈子「北魏河南の一光三尊像」(『東方学報』京都69冊, 1997年。のちに同氏著『北魏仏教造像史の研究』(ブリュッケ, 2005年)に所収)。
- (15) 石松日奈子「弥勒像坐勢研究—施無畏印・倚坐の菩薩像を中心に—」(『MUSEUM』502号, 1993年。のちに同氏著『北魏仏教造像史の研究』ブリュッケ, 2005年に所収)。
- (16) 石松氏前掲注(14)論文。
- (17) 張氏前掲注(1)論文, 岡田氏前掲注(1)論文参照。
- (18) 岡田氏前掲注(1)論文, 38~40頁参照。
- (19) 張氏前掲注(1)論文, 45頁参照。
- (20) 張氏前掲注(1)論文, 45~46頁参照。
- (21) 『魏書』卷24・鄧淵伝附恭伯伝
 鄧淵, 字彦海, 安定人也。…靈珍弟靈奇, 立忠將軍・齊州刺史。進號冠軍將軍, 賜爵昌國侯。爲政清簡。子恭伯, 右光祿大夫。
- (22) 「崔令姿墓誌」は, 1965年に山東省済南市東郊聖仏寺村の東で発見された。現在, 済南市博物館に所蔵されている。なお, 黄石崖の孝昌二年の帝主元氏法義卅五人題記の中にも, 鄧恭伯と共に妻の崔令姿も邑義の一員として名前が挙がっている。墓誌によれば, 崔令姿は清河武城の出身である。清河崔氏のうち一部(清河房・青州房・烏水房)は, 南燕の滅亡前後に南の齊州・青州地域へ渡り, そこで当地第一の豪族となった。ただ, 崔令姿がどの房に属するかは分からない。「崔令姿墓誌」については, 趙超著『漢魏南北朝墓誌彙編』(天津古籍出版社, 1992年)325~326頁, 頼非著『齊魯碑刻墓誌研究』(齊魯書社, 2004年)第四章「山東望族墓地及墓誌考釈」236~237頁を参照。清河崔氏については, 韓樹峰著『南北朝時期淮漢遼北的辺境豪族』(東方歴史学術文庫, 社会科学文献出版社, 2003年)第二章「南北対立與清河崔氏的沈浮」50~51頁を参照。
- (23) 「崔令姿墓誌」の墓誌蓋では, 鄧恭伯を南陽の出身としている。しかし, 『魏書』卷24・鄧淵伝では, 曾祖父の鄧淵を安定の人としている。『元和姓纂』卷9によれば, 南陽鄧氏は「後漢太傅・高密侯鄧禹, 其先居南陽, 子震嗣。…鷲七代孫晉生(生は衍字)武威太守〔世龍〕, 因居安定, 始家焉。子羌, 苻秦并州牧・左僕射。…」とあり, この鄧羌が鄧淵の祖父にあたる人物と考えられる。
- (24) 鄧述の齊州刺史就任の時期については, 吳廷燮『元魏方鎮年表』(『二十五史補編』第4冊, 台湾開明書店, 1959年所収)を参照。なお, 『元魏方鎮年表』では鄧靈奇の齊州刺史就任を太和三年としているが, その根拠となる『魏書』卷24・鄧淵伝附靈奇伝には, 彼がいつ齊州刺史に就任したか具体的な時期までは記されていないので, ここでは採らない。
- (25) 韓氏前掲注(22)書, 第一章「青齊豪族在南北朝の変遷」第四節「魏孝文帝時期的南北形成與青齊豪族的動向」を参照。
- (26) 北魏末の戦乱で郷兵集団を率いた勃海の高乾一族について, 氣賀澤氏は, 彼らが郷党社会を基盤にして実力をつけてきた新興の在地豪族とし, 封氏と高氏の関係から, 漢族社会においては, 「漢族貴族(山東貴族)—豪右(在地・新興豪族)—郷兵(部曲)」という重層関係が存在したことを示した。この関係は齊州地域にも存在すると思われる。清河崔氏に代表される「山東貴族」—地方官就任を背景に勢力をつけてきた「新興豪族」の鄧氏, というようになるのではないかと。氣賀澤保

規「東魏—北齊政權下の郷兵集団」(『府兵制の研究—府兵兵士とその社会—』同朋舎, 1999年), 184~187頁を参照。

(27) 張氏前掲注(1)論文。

(28) 『魏書』卷19上・景穆十二王列伝第七上・京兆王伝附元暹伝

仲景弟暹, 字叔照。莊帝初, 除南兗州刺史, 在州猛暴, 多所殺害。元顥入洛, 暹據州不屈。莊帝還宮, 封汝陽王, 遷秦州刺史。先時, 秦州城人屢爲反覆, 暹盡誅之, 存者十一二。普泰元年, 除涼州刺史, 貪暴無極。欲規府人及商胡富人財物, 詐一臺符, 誑諸豪族等云欲加賞, 一時屠戮, 所有資財生口, 悉沒自入。孝靜時, 位侍中・録尚書事。薨, 贈太師・録尚書。

(29) 劉桃符について, 『北史』卷49・侯深伝には「城人劉桃符」とある。『資治通鑑』卷156・梁紀12・武帝中大通六年(534)冬10月条には「城民劉桃符」とあり, 『北史』が唐の太宗李世民的諱を避けて「民」を「人」としていることが分かる。「城民」については, 谷川道雄「北魏末の内乱と城民」(『史林』41-3・5, 1958年, のちに『隋唐帝国形成史論』筑摩書房, 1971年に所収)を参照。

(30) 『魏書』卷77・羊深伝

及出帝入關, 深與樊子鵠等同逆於兗州。子鵠署深爲齊州刺史, 於太山博縣商王村結壘, 招引山齊之民。天平二年正月, 大軍討破之, 於陣斬深。

(31) 『北齊書』卷2・神武帝本紀下・天平元年八月条

神武(高歡)以萬機不可曠廢, 乃與百僚議以清河王亶爲大司馬, 居尚書下舍而承制決事焉。

(32) 『魏書』卷80・侯淵伝

〔侯淵〕行達廣里, 會承制以淵行青州事。齊獻武王(高歡)又遣淵書曰:「卿勿以部曲輕少, 難於東邁。齊人澆薄, 唯利是從, 齊州城民尚能迎汝陽王, 青州之人豈不能開門待卿也。但當勉之。」

(33) さらに張綏氏は, 第1洞の3体の大仏も乞伏鋭・元暹・鄧恭伯の三人によって造営されたのではないかと推測している。張氏前掲注(1)論文。

(34) 谷川道雄著「北朝後期の郷兵集団」(同氏著『隋唐帝国形成史論』所収), 250~251頁を参照。

付 記

本論文は, 平成19年度科学研究費(若手研究B 17720177)「北朝隋唐期の仏教教団の宗教活動と中国の国家及び社会に対する影響の研究」による研究成果である。

